



2016 vol.15

こころの未来

特集「こころ学」創生

ごあいさつ

『こころの未来』第15号のテーマは、「こころ学創生」です。異なる分野の研究者が集まり、相互に連携しながら多様なアプローチで「こころ」を研究する小さな組織が京都大学に誕生したのが2007年。本誌『こころの未来』の生みの親、育ての親であり、宗教哲学、民俗学が専門の鎌田東二先生、前頭連合野に関する多数の論文を、Nature など欧米の専門誌に発表してこられた船橋新太郎先生。これまでセンターで「こころを探求する多様なアプローチ」の文系、理系の要として活躍してきたお二人の先生が2016年3月で定年を迎え、センターは来年、設立10周年の節目の年になります。巻頭の座談会では、これまでの歩みを振り返り、センターの研究、教育、実践の総体から生まれる「こころ学」について、それぞれの研究者が思い描く姿とこれからの抱負を語り合いました。忌憚のない意見交換から「こころの未来の未来」が具体的な活動につながってゆく、センターの日常の雰囲気をお伝えできればと思います。センターの全研究者の研究総括と合わせて、お楽しみください。

2016年3月

京都大学こころの未来研究センター長 吉川左紀子

こころの未来
KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

2016 vol. 15

目次

ごあいさつ	吉川左紀子
01 巻頭言 こころの在り処と広がり	山極壽一
02 座談会 こころの未来研究センターと「こころ学」の創生	吉川左紀子＋船橋新太郎＋ カール・ベッカー＋河合俊雄＋ 鎌田東二＋内田由紀子＋ 阿部修士＋熊谷誠慈
研究総括〈特集・こころ学創生〉	
16 こころの学際研究、およびセンターでの取り組み	吉川左紀子
20 人のこころを脳の働きで理解する	船橋新太郎
24 ケア現場の「こころ学創生」	カール・ベッカー
28 近代意識の過去と未来とその周辺	河合俊雄
32 こころ学への試み	鎌田東二
36 こころへの社会科学的アプローチ ―文化とこころへの問い	内田由紀子
40 脳とこころの文理融合研究 ―正直さの研究事例から	阿部修士
44 「こころ」の文献学的研究の総括および展望	熊谷誠慈
48 現代社会とこころの「発達」	畑中千紘
49 超高齢社会への挑戦 ―臨床と研究の折衷派だからできるアクションリサーチを命綱に	清家 理
50 環境が調整するヒトの知覚・認知	上田祥行
51 自分自身の死をこころに描くこと	柳澤邦昭
52 センターの主な動向(2015年4月～9月)	
編集後記	

こころの在り処と広がり



山極壽一（京都大学総長）

1952年東京都生まれ。京都大学理学部卒業、同大学院理学研究科博士後期課程研究指導認定退学。京都大学大学院理学研究科助教授、同教授等を経て、2014年10月より現職。理学博士。専門は人類学・霊長類学。著書に『京大式おもしろ勉強法』『「サル化」する人間社会』『家族進化論』『ゴリラ』など多数。日本霊長類学会会長、国際霊長類学会会長を歴任。日本アフリカ学会理事、中央環境審議会委員、日本学術会議会員、国立大学協会副会長。

Juichi YAMAGIWA

こころの時代と呼ばれて久しい。しかし、いまだにこころの在り処はよくわかっていないし、それをコントロールすることもままならない。こころが個人に属しているのか、自分とつながりのある何かに貼りついているのか、わからないままに不安が増幅していく。科学の力だけではこころは解明できないし、宗教に頼っても確信には至らない。でも、私たちは常にこころを感じ続けている。いったいこの感覚は何なのか。

私がこころを強く意識したのは、野生のゴリラと抱き合ったときである。私が雨宿りをしている大木の洞にタイタスと名付けた6歳のオスゴリラがやってきた。人間なら中学生ぐらいの年頃である。タイタスはじつと私の顔をのぞきこみ、それから大胆にも私に抱きついてきた。洞の中には彼が体を入れる隙間がなく、私の表情を見て折り重なって雨宿りできると判断したのであろう。しばらくすると、彼は私の肩にあごを乗せて眠ってしまい、寝息を立て始めた。私は2時間近く、80キログラムはあろうと思われるゴリラの体を受け止めねばならなくなったのだが、不思議に幸せな気分浸っていた。タイタスの体温と湿度とにおいを感じながら、こころが解け合ったような感覚を覚えたからである。タイタスのこころが近寄ってきて、私の中に入ってきたような気がした。

そのとき、私はゴリラのこころが身体とぴったり結びついていることがわかった。ゴリラは体の動きでこころを表現する。それは疑いようのない世界だ。しか

し、どうも人間は違うようだ。体とこころは一体ではない。そこに人間のこころの独特なありようと現代の不安が潜んでいるような気がしたのである。

「こころ、ここにあらず」と言うように、人間には体の動きがこころを表していないことがしばしばある。それは、人間が何かの作業をしながら、その作業とはまったく別のことを考えるときに起こる。つまり、人間はこころを体の外に出してしまうのである。五感を通じて感じ取った物や考えにこころを貼り付けることができる。虫になり、鳥になり、魚になって別の世界へこころを移動させることができる。人が作った物にはこころが貼りついているから、それは単なる物質ではなく、作者の意図や夢を伝える媒介物になっている。

さまざまな物を介して、人間は絶えずこころを感じているが、その核心になかなか触れることができない。それは、こころを表す物を作り過ぎてしまったからではないだろうか。実は言葉もその1つである。私たちは言葉を通じてこころを感じるができるが、じかに触れることはできない。しかも現代の情報技術は、文字や映像を電子化して瞬時にどこへでも送ることを可能にした。インターネットの中には、膨大な情報に貼りついた人々のこころが行方を定めぬままにさまよっている。

私たちはもう一度、こころが触れ合えるようなコミュニケーションを取り戻す必要があるのではないだろうか。それを人間とは違う動物の暮らしから検討してみたいと思う。

こころの未来研究センターと「こころ学」の創生

吉川左紀子(京都大学こころの未来研究センター長)／船橋新太郎(同教授)／カール・ベッカー(同教授)
河合俊雄(同教授)／鎌田東二(同教授)／内田由紀子(同特定准教授)
阿部修士(同上廣こころ学研究部門特定准教授)／熊谷誠慈(同上廣こころ学研究部門特定准教授)

はじめに

吉川左紀子 今日「『こころ学』の創生」をテーマに話し合いたいと思います。

京都大学こころの未来研究センターは2007年4月の創設から9年めに入りました。センターの組織としての規模は設置当初から変わっていませんが、2012年に連携MRI研究施設ができて脳科学研究の基点ができましたし、財団や企業のご支援を受けて上廣こころ学研究部門、こころの豊かさ研究部門という2つの寄附研究部門ができて、センターのあり方もこの2、3年で大きく変わってきました。それとともに、センターとして向かうべき方向というか、やるべきことも見えてきました。これまでのセンターの対外的な活動に対する反響も蓄積されてきていて、外からの期待の大きさも実感として感じられます。

去年(2014年)はアメリカのMind and Life Instituteと共同で、ダライ・



吉川左紀子センター長



国際シンポジウム Mapping the Mind: 科学者・宗教者とダライ・ラマ法王との対話(2014年4月11・12日、京都ホテルオークラ)

ラマ法王をお迎えして国際シンポジウム Mapping the Mind を開催しましたが、こうしたインパクトのある公開事業を実施したこともこれまでにない新たな経験だったと思います。医療専門職や教員を対象にした「こころ塾」や、今年(2015年)から始まった京都こころ会議のように、シリーズで継続していくプログラムもいくつかできてきました。

今日はそうしたセンターの研究、教育、社会発信の現状を踏まえて、センターの長期的ミッションである「『こころ学』の創生」について、意見交換できればと思っています。

動物実験はヒトのこころを知るため

吉川 2007年にセンターがスタートした年からおられる船橋(新太郎)先生と、2008年に着任された鎌田(東

二)先生が今年度で定年を迎えます。教授の異動は、センターが始まって初めてです。船橋先生は、センターで唯一、動物実験で脳の働き、こころの働きを研究するというアプローチでやってこられたわけですが、率直に言って、こころの未来研究センターという場所は先生にとっていかがでしたか。センターは全体として人文社会系が中心になっている組織です。その中で、困ったこととか大変だったこと、あるいはここは悪くなかったというようなことがあれば、そんなところからお話しただけませんか。

船橋新太郎 よかった点は、センターに所属したことで、科研費で基盤研究Aがとれたことです。人間・環境学研究科(人環)に所属していたら、継続して獲得するのは難しかったらと思うと思います。



船橋新太郎教授

吉川 それはどうして？

船橋 人環は教養部の延長だという意識が他部局の皆さんからどうしても抜けないように思われます。また、医学部などではないので、脳の研究に関して基盤研究(A)のような研究費をとることはできなかったのではないかと思います。センターに移ったおかげでとれたというふうに、個人的には思っています。

残念なことは、このセンターができる前に、「こころの研究センターに動物を使って侵襲的な研究をする人はふさわしくないんじゃないか」という意見がありましたよね。そのとき私は、そうかもしれない、そうだとするとセンターから離れたほうがいいなと思ったんです。でも、理事や医学部のほうから、「メンバーとして残っていても良かったほうがいい。そうでないと、こころの未来研究センターには医学系との間に入る人がいなくなり、完全に人文系のセンターになってしまう」という意見がありました。というわけで、私がセンターの一員となっています。

実際にセンターの進んでいる方向は人文系に向いています。阿部(修士)さんの研究は多少人文系に近いからいいけれども、私がやっている動物実験は、まったく違った方向に向かっているという仲間はずれのような雰囲気ができ上がっているように感じます。

鎌田東二 私なんか外から来たので、

船橋先生のような人がいてくれて本当によかった。というのは、最初にどういうふうに幅を設定するかによって、その後のふくらみ方が変わっていきますよね。だから、侵襲性・非侵襲性の問題だけではなくて、こころを考えるとという領域の中で、脳のことや動物のことも含めて幅広い視野から見ていくという点では、むしろ船橋先生はいてくれないと困る。私は一貫してそう思ってきましたし、いまでも、やっぱりいてくれたことによって、基盤になる学問的なベースとして1つの柱ができていると思うのです。

カール・ベッカー 我々にとって船橋先生の存在はありがたいのですが、船橋先生にとってのセンターは？

船橋 私がやっているのは確かに動物実験ですが、動物実験ということに焦点が当たり過ぎているような気がするんです。私は、手段として動物実験をやっているけれども、それによってヒトの脳、ヒトのこころの研究をやっているという意識なんです。だけど、一般の人からは、「動物を使って侵襲的な実験をやっている人」というふうに見られてしまう。だから、こころの探求はこういうものだという人からは多少拒否反応みたいなものが出てくるのかもしれない。私が本来めざしていることが十分理解されていないかもしれないことが、残念だと思うのです。

吉川 動物実験の結果を人の脳の理解につないで、さらにそれをこころにつなぐ、そのあたりが専門外の人間には分かりにくいところがあるんですよね。

海外から見たセンター

吉川 こころの未来というセンターにいて、人環にいたときに比べて同分野の研究者の人たちのリアクションが違うといったことはあったんでしょうか。

船橋 それは特にないですね。でも

私の印象では、最初は「彼は、意識やこころなど、実験的研究にはあまりそぐわない分野に行ってしまったか」という感じでした(笑)。つまり、ベーシックな研究から離れて、哲学的、形而上学的なところに行ってしまった、と思った人もいたようです。だから最初のころは、「いままでどおり実験的研究者として研究をやっていますよ」ということを対外的に示すために、いろいろな神経科学分野の人を呼んで精力的に研究会を開きました。私がセンターでどのような実験・研究をしているかの理解が次第に定着しましたから、最近ほとんど研究会をやっていませんが。

吉川 船橋先生はフランスの研究者とか、海外の研究者との交流をさかんにしていましたよね。

船橋 向こうの研究者は、私のことを「こころの研究者」というふうには捉えないで、神経科学の研究者で動物を使った神経生理実験をやっている人間という扱いです。

外国にはブレイン・サイエンス・センターとかマインド・リサーチ・センターといった研究施設がありますが、そこはだいたい生命科学系、つまり私たちのような研究や、あるいは分子系の研究が中心です。だから、私が「こころリサーチ・センター」にいて、特に違和感を持っている人はいませんでした。

どちらかという、私が「こころリサーチ・センター」のことを伝えるときに、「ニューフィジオロジスト、あるいはブレイン・サイエンティストは私1人だけで、あとはサイコロジスト、臨床的・サイコロジスト、宗教学、あるいは民俗学の研究者です」と言うと、みんな「えーっ」と思うようです(笑)。

河合俊雄 だからある企業の人も、こんなメンバーでやっているのは世界にこしかなかったと言われる。

吉川 そうですね。こころの未来研究センターのようなセンターはほか

にはない、というのは、そうだと思いますね。もし似たようなところがあれば、そこのやり方を参考にできるので、もう少し楽しかったんじゃないかな（笑）。

センターは会議がおもしろい

鎌田 私は1年遅れてこちらに入りました。私自身は、高校で国語教師をした後、専門学校で倫理学などを教えたり、幼稚園の教員養成にかかわったりしました。それから短期大学の健康生活科で教えて、次に京都造形芸術大学の芸術学部に行ったので、かなり幅広い領域を巡ってきたわけです。

その上でこちらに来たので、私の中では違和感はまったくなかった。健康生活科というのは、心理、生理、栄養、体育などで、からだのことをやっている人が多かったのです。ですから、そういう領域と、マインドにかかわる芸術の領域と、私がやっている宗教の領域をいかに総合することができるのかという観点はずっと私自身の中にありました。

こちらに来て、最初は科研の「モノ学・感覚価値研究」をやっていました。その後、科研が「身心変容技法の研究」に移り、それまでやってきたものを集大成するような形で、人間はこことからだと社会との関係の中でどう変容していくことができるのかというテーマを追究していました。ですから、教育・研究の流れからすると、必然的に全部を総合するような形でここに行き着いたのです。

特に私にとってよかったのは、すべての機関の創生期の5年、10年はきわめて重要でおもしろい時期ですよ。このころの未来研究センターが始まって、まだはっきりしない「こころ学」という領域がどういうふうになり形を整えていくのか。どんなふうにして社会に寄与できるのか。そういういちばん挑戦的なところとそれを展



鎌田東二教授

開している時期にかかわることができたので、タイミング的にも内容的にも非常に刺激的でした。

周りの人からも、「鎌田君がこころの未来研究センターに行ったのは本当によかった。ぴったりだね」などと言われました。そういう意味では、サイズの合った洋服のように身にまとうことができ、もうこのまま死に装束になってもいいかなと（笑）。だから、私にとっては非常に幸福な時間でした。

このセンターのいいところは、ひとつは幅の広い領域を扱っていることです。それから、いままで経験したいいくつかのところでは、教授会も含めて、会議がおもしろくないのです。でも、こころの未来研究センターの会議はおもしろい。様々な話題が出てくるし、少し突っ込んだ話もできるし、けっこうバカなことも言える。そういう意味で里山的というのか、バラエティがあって、会議そのものがストレスにならない。それは非常にいいところだと思うのです。

そういう会議を通して、様々な領域にいる人たちのポジションや仕事などを知ることができる。たとえば今日も、心理学会で表彰されたという話がありましたが、そんな話を聞くと、自分のやっていることが活性化してくる。そういう波を浴びているという点でも、非常によい環境でした。特に若い人は、若い時期に創生期にかかわっていちばんいい部分

を吸収し、それを展開していくことができるので、とてもよかったのではないかと思います。

日本人のこころを知りたい

ベッカー 私は40数年前に日本に移住してきましたが、それは日本人のこころを知りたいと思ったからです。当時、私は京大の文学部に入って、宗教を教団や宗派としてではなく、底力や信念として日本人を理解したいと思いました。また、許可をもらって病院でシャドーイングをしたり、末期患者と接したりしました。阪大や筑波大をまわり、京大に戻ってきたときには、運よく杉万俊夫先生や北山忍先生と同じ講座に入りました。

もちろん、人類共通のこころの側面も、サルから学ぶべき脳生理学的な側面も数多くあります。ただ、そういった普遍的な部分より、私を育ててくださったハワイの日系人や、70年代にホームステイをさせてくださった日本人のこころに興味を持ったのです。礼儀作法にしても阿吽あうんの呼吸にしても、いまでも私にとってこころの勉強が続いていると思っています。どのように日本人が交流し合って物事を決定するのか、あるいは決定を延ばすのか、その異文化性は、いまでも学びの連続です。

しかし、この30年で学生ががらりと変わっていると感じています。たとえば、30年前に担当していた最初の倫理学の授業で、いたずらに「惜しまずに命を捧げるものはありますか」と聞いたら、多くの学生が戸惑わずにリストを作り出すのです。親、家族、国、正義、云々。いま同じ質問をしても、「アホちゃうか」と言われるくらいで、「自分の命より重いものはあり得ない」と思っているようです。いまの日本の若い人たちは、彼らの先輩や教員とは明らかに違うメンタリティで生きているのです。

ポール・ティリッヒ（Paul Tillich、



カール・ベッカー教授

1886-1965) が、「宗教は究極の関心事」と定義したのですが、私もその定義に賛同します。でも、いまの若い世代が究極的に関心を持っているものと、我々の世代が究極的に関心を持つものとは、かなり違ってきていると思うのです。

そんなことが勉強になるし、同時に、日本はこれからどうなっていくのかと考えてしまいます。単にアメリカの二番煎じになるのでは、文化的にはもったいないと思います。日本の伝統文化、こころの内容と魅力を次世代にどう伝えるかを絶えず考えてしまいます。

私にとって、センターに来たことはとてもよかったと思っているのですが、それは多岐にわたる学者と密接な交流ができたからです。ただ、20年前は、人環の講座会議でも毎週弁当を持ち寄って、いろいろな情報交換と回覧をしているなかで、目の前の情報だけではなく、それこそこころのいろいろなところが見えてきた。個人的にはそれがよかったと思うのですが、インターネットの時代になると、回覧も一斉メールで済ませてしまって、同僚と弁当を食べる機会もなくなりました。

最近はこちらの未来研究センターでも語り合う機会が少なくなって寂しいです。でも、時には隣の鎌田先生や熊谷(誠慈)さんなどとお話してきたり、私がお邪魔したり、内田先生の幸福研究会などに出席すると、

すごく接点が多くて、皆さんの研究から学び、自分の研究も反省する機会を得られるので、感謝そのものです。

コンサルティングという役割

吉川 センターができたころ、こころの未来研究センターは何をめざしていったらいいんだろうという話を、船橋先生、ベッカー先生、河合先生と4人でしたとき、ベッカー先生が「センターには、社会が必要としているこころの知識とか、様々な情報を伝えていくという役割がある。そういうところについてのコンサルティングを積極的にやっていったらどうか」と言われたことが記憶に残っています。そのとき、実は私はその意味がよくわからなかった。はじめのころは、基礎研究を中心にしたセンターというイメージで考えていました。いまは、私もそうですが、脳科学の阿部さんも文化心理学の内田(由紀子)さんも、企業や地域行政の人たちと連携して仕事をするのは当たり前ようになっていて、そうじゃないこころの未来研究センターの姿は想像できないくらいです。じゃあ基礎研究ではなく応用研究や実践が中心なのかというと、そういう方向でもない。以前、下條信輔さん(カリフォルニア工科大教授。センター特任教授)と、これから必要になってくるのは基礎研究の成果を応用につなごうという一方向の橋渡し研究(Translational research)じゃなくて、社会の中にあるこころの問題の解決につながる基礎研究を行ってその成果を社会に発信する、「逆橋渡し研究(Inverse translational research)」だよ、と話していました。今のセンターはそういう方向に向かっていると思います。

ベッカー 私は看護研究会を毎月のように続けています。いろいろな病院の看護師が集まって、お互いの悩みを打ち明けながら、改善策を求め

ます。また、数年にわたって現役の教師や看護師を対象に瞑想研究会をやりました。いま清家(理)さんは「くらしの学び庵」を週末にやっています。河合先生のようなマン・ツーマンの臨床はとても私なんかにはできませんが、社会のニーズを把握しながら、話し合いによって、少しでもこころをよくするような事業ができるのは、センターのおかげだと思っています。

こころに関する具体論と抽象論

河合 心理療法とか臨床心理学を考えると、20世紀の初めから半ばぐらいは、「こころとは何だろう」という問いが大きかったのではないかと思います。しかし、心理療法がエスタブリッシュされてくるにつれて、道具的なものになっていきます。つまり、心理的問題をどう解決するか、その方法がわかっただけという方向に変わってきたのではないかと。

そういう意味で、「こころとは何だろう」という問いは、もうあまり心理療法でも問題になっていないのではないかな。しかし、私にとっては、たぶん例外的だと思うのだけれど、「こころとは何だろう」という問いはすごく大事なんです。

それは二重性があるなと思っています。たとえば、企業の人に来て、このごろの新入社員とうまくいなくて困っているというときのこころは具体的だと思うのです。あるいは、内田さんが調査に行き、漁村でのいろいろなことにかかると、こころって必ず具体的です。しかし同時に、すごく抽象的なものとしても問える。こころにはその両方があると思います。

私の方法論としては、具体的などころから入って、なるべくそれを抽象度の高いところで捉えたい。しかも、こころは生き物なので、5年、10年のスパンでどんどん変わっていく。その中でいまを捉えたい。その両



河合俊雄教授

方ができたらいいと思っています。「こころ学」はそういうものではないかと考えています。

宇宙飛行士と理論物理学者と数学者はどう違うのか

河合 こころの未来研究センターに来てどうだったかという、私にとってよかったと思うのは、まず、方法論という意味が大きい。たとえば、臨床心理学とか心理療法をやっていると、個別の経験からエッセンスをつかむことが多いのです。だから、解釈の部分が多い。けれども、ソフト・サイエンスの人などに接していると、それを調査したり、実験してみるとどうなんだろうと考えるようになる。実際、内田さんや阿部さんと進んでいる計画もあるし、具体的に動いている研究もあります。

昔、ある有名な物理学者が、宇宙飛行士と理論物理学者と数学者はどう違うのかということをととえてこう言いました。スコットランドを電車で旅行していると黒い羊が出てきた。「おおっ、スコットランドの羊は全部黒い」というのは宇宙飛行士です。物理学者は、「ああ、スコットランドには黒い羊がいる」という。数学者は、「スコットランドには、少なくともからだの一面が黒い羊が1匹いる」という(笑)。つまり厳密さが違うんだという話です。

臨床心理学をしていると、1事例

で何か書くことが多いので、宇宙飛行士よりもひどくなる傾向があります。そこで、理系の学問、バイオロジーや物理的なことまで含めて、違う方法論や見方に接することは、新しい発想を得るだけではなくて、自分の限界を知るという意味でもすごく大事です。

先日の京都こころ会議でも、中沢新一さんが宇宙飛行士みたいな推論をしても、山極(壽一)さんが、「生物学から見るとそうは言えない」と言う。はっきりしたデータがあるわけです。そうすると、考え直さないといけないということになる。そういう意味で、こころを研究するときに、理系の学問と切れたら絶対だめだと痛感しました。それは自分のこととしてもそうですが、こころの未来研究センターを発展させていくためにも、サイエンスなしでこころを考えることはあり得ない。

だから、ここにいることは自分にとってすごくおもしろくて、必ずしも共同研究をしていなくても、ほかの人の発表を聞くことで全然違う発想が得られる。

それから、それぞれの分野の人の外延があるわけです。たとえば熊谷さんがいると、ブータン仏教だけでなく、仏教全般とか、哲学的なものとか、すごく広がりがあるわけです。認知心理学も、その人の分野だけではなくて、その人の連れてくる人やその広がりをうまく使うと、相当なものがリソースとしてある。

そういう中で、共同研究が自然に起こりつつあるという段階に来ていて、それがもうすこし進んでいくとどうなるのか、今後の楽しみです。

吉川 京都こころ会議のあと、雑談のなかで河合さんが、「センターには生物学の研究者が要るよね」と話していました。私はそれを聞いたとき、「河合さんがこういう発言をするようになったか。センターでの9年は大きいな。もし河合さんがずっと教育学研究科にいたら絶対に出てこ

ない発言だな」と思いました。

河合 小さな差異にこだわっていたからね。

吉川 そうなんですよよね……。臨床心理と認知心理は同じ心理学なのにどうしてこう考え方が違うのか、とかずいぶん議論した気がしますが、まあいくら白熱した議論をしても心理学という枠の中の話です。

こころの未来研究センターに来てから、自分がずいぶん狭い枠の中のものごとを見ていたことを実感しました。心理学者の集団の中に入ったら、どうしても他の心理学者との差異に注意が向かってしまう。その一方で、たとえば心理学はほかの学問分野からみてどうなのかといったことは、普段はほとんど考えないんです。それがこころの未来研究センターだと、「心理学者はこの点についてどういう考えかたをしているんでしょう」といった違う分野の人からの問いをいつも頭に置きながら自分の発想をチェックしているようなところがあります。

センターができたときに、私は挨拶の中で「里山のような場をつくりたい」と言ったんですが、そういう場では、中にいる人の発想も変わっていきます。それは、肌身で感じますね。

支える人を支える

河合 さっきコンサルテーションの話が出ていましたが、「こころ」の1つのおもしろい機能はリフレクトするということです。外から見ることができる、振り返ることができるというのは、大きなことです。

このごろ臨床心理士がいろいろなところに出ていきますね。病院でのターミナル・ケアや小児科もそうだし、危機介入で、震災はもちろん、台風とか、自殺者が出たとか、犯罪被害者への対応といって臨床心理士が出ていきます。そうすると、現場で頑張ってサポートしようとしても、

何が起っているかわからなかったり、抱えきれなかったりする。

そんなことから、最近、私にとってけっこう大事な仕事になってきたのがスーパービジョンです。そのケアを行う人の話を受け止めることがまず大事で、さらに現場で何が起っているのかわかる場合があります。それを全部言ったらいいわけでもないけれど、ある程度説明してあげることが、こころにかかわる上ですごく大事なのではないかと。

吉川 「支える人を支える」というコンセプトも、私はすごく重要だと思っています。子どもを親が支えるにしても、先生が生徒を支えるにしても、そんな支える役割を担っている人たちに必要なところについての知識を、広い視野の中で伝えていく。河合さんの言葉ではスーパービジョンだし、ベッカー先生の言われるコンサルティングですが、そういうことがこのセンターの1つの役割だなということも、最近、感じています。

自分の立ち位置を相対化

内田由紀子 私は、センターが立ち上がってすぐのころ、30代になったばかりで着任し、3年間の助教を経て准教授になりました。20代のうちはある意味、大学院生の時代の「貯金」で研究をしていたようなところがあって、私の場合でいうと、恩師の北山忍先生との研究の蓄積がそれにあたります。独り立ちをし始めた30代のときにセンターで過ごせたのは、私にとってとても大きなことだったと思っています。

いちばん大きかったのは、つながりが増えたことです。20代から30代は誰でもつながりが増える時期なのかもしれませんが、たぶんそれだけではない。こころの未来研究センターに来なかつたら、これだけのつながりはできなかったと思います。

たとえば、着任当初から農業の普及指導員さんの調査を始めたのです

が、あれはとてもセンターらしい研究として実施できたなと思っています。外部からもちこまれた研究課題であり、応用的な観点や講演活動などのコンサルテーション的な部分を含みながらも、実際に実施したのはどちらかといったらかなり基礎的な研究ではなかったかと思います。それをフィードバックすることで、普及指導員さんたちとの新たな関係を築くことができ、そこからどんどん世界が広がっていったのです。

私は比較文化研究をやっていて、とくに日本とアメリカを比較していました。かつては「日本」とひとくくりにして大学生を対象とした研究を実施しながら、一方で日本のコミュニティにおける文化はどうなっているのかを知りたいと考えていました。多層的な現象としての文化を捉えるために、こころの中の問題、対人的あるいは小集団での問題、そして社会環境の問題のそれぞれの層とその相互作用に関心が向きはじめました。

センターに来るまでは、ほとんど同じ分野の研究者の人と付き合うことが多かったです。それが、普及指導員さんにつながって、そこからさらに、里山の研究をしている人や、地域コミュニティの資源を研究する経済学や公共政策の分野の人など様々な分野の人、それからアカデミック以外の方々との共同の機会も増えました。しかし、基本的な研究ツールは変わっていません。これまでどおり自分が積み重ねてきた方法論で実証研究をやっている、調査をやりまじし、実験をやるんです。だけど、それをどう組み立てるかとか、最終的にどういうふうにしていくかといったコンセプトがすごく変わったのではないかと思います。

外の人とのつながりもそうですが、センターの中の先生方がそれぞれ多様で、しかも、河合先生がおっしゃったように、それぞれに外延がある。つながりやソーシャル・キャ



内田由紀子特定准教授

ピタル的なものがすごく増えているんです。それによって自分の立ち位置を相対化することができる。文化心理学しか知らない中で「私は文化心理学者です」という場合と、文化心理学者ができることは何だろうといういわば「外向け」のメッセージや視点を踏まえて「私は文化心理学者です」と言うときでは、自分の表出する態度が違うのではないかと感じています。そのつながりによる相対化は、私のある種のこころの可能性を増やしてくれたのだらうと思います。

豊かになった海外とのつながり

内田 それから、海外とのつながりができたことはすごく大きい。たとえば、私の研究室はJSPS (Japan Society for the Promotion of Science) のサマー・プログラムでの大学院生の受け入れや、特別研究員での若手研究者の受け入れ、あるいは招聘研究者やフルブライトでBeth Morling先生やSteven J. Heine先生、Vinai Norasakkunkit先生、あるいは増田貴彦先生を受け入れたりしてきました。スペースの問題やお家のセッティング、その人が家族ぐるみで京都に来られることなどもあって、ある程度組織単位でのキャパシティが必要なことです。たぶん普通の研究環境だと限界があって断らなければいけなかったケースもあったかもしれません。

しかし、こころの未来研究センターには「リエゾンオフィス」があって全面的にサポートして下さるし、メンバーの懐の広さにより、会議などでも、「今度、こういう方が来ます。ぜひ交流してください」と紹介できる。来ていただいた方にもすごく喜んでいただけて、おかげさまでリピーターが多い。「京都はホームタウンだ」と言ってくれる人もいます。こうしてセンターに文化心理学の拠点（Cultural-KOKORO network）を設置し、グローバル環境の実現ができたのはこころの未来研究センターという場所の持っている性質によるところが大きいと思うのです。

海外の研究者とのインタラクションとかコラボレーションは、文化心理学者としての自分、そして指導する院生たちにとっては要となる部分で、それが途切れずに実現できていることはかなりありがたい。現在のゼミはずいぶん国際色豊かになっており、ゼミでのディスカッションを毎週英語で実施できる環境になりました。

これからの5年、10年を考えたときに、いまここで得させていただいたものを、どういうふうに投資していこうかなと考えました。そのチャレンジの1つとしてJST-RISTEX（Research Institute of Science and Technology for Society）の「持続可能な多世代共創社会のデザイン」という領域での提案にアプライすることにし、今年度から「集合的幸福の概念構築と多世代共創の効果検証」という大きなプロジェクトに取り組みたいと考えています。里山や京都のコミュニティなどでの幸福をどのように定義していくかということ、心理学などの行動科学的な要素、生物学的な要素、環境要因的な要素まで含めて、しかも地域の人々や自治体、企業、NPOと協働して実施していこうと考えています。ここからまた新たなフェーズを作っていきたいと思っています。

最後にもう1つ、私たち第2世代と

もいえる准教授3人は、研究者としての熟成とはどのようにあるべきだろうかについてのロールモデルを見いだしていこうという目線で、第1世代の先生のお仕事ぶりから学んでいます。そういうときに、第1世代の先生方から、自分たちは「センターにきてからこうなった」といったようなお話を聞くと、とても励まされます。自分たちはいつでも、いつまでも変わっていけるし、もっといい方向に向かってやっていけるという希望が持てる。これからのセンターを支えていけるように成長せねばと考えるとき、ロールモデルがそばにいるのはとても大事なことです。

自分のツールにこだわる

河合 いまの内田さんの話はどれもすごく印象的だったのですが、ツールのことを言いましたね。

最初、普及指導員が相談に来たときに、自分のできることは調査だと考えたというはすごくよかったと思う。私なんか、ツールが違うわけです。そうすると、全然違うアプローチをする。たとえば、震災支援に行っても調査をしようなんていう気は全然ないわけです。人に会っている中でつかむしかないと思っている。でも、後になると、調査もしておいほうよかったかなという気もするんだけどね（笑）。

だから、自由にやっているんだけど、自分のツールにこだわったというところは印象的でした。

ベッカー 内田先生がコンサルテーションについておっしゃったことがすごく腑に落ちました。看護師から、あるいは困っている教師から、どうしようかと聞かれても、私はその答えを持っていないのですが、調査はできます。それじゃ、調べてみよう。多くの看護師や介護士、教師などを調べた上で、そのデータを一緒に解析していくと、いろいろな新しい見解が見えてくる。

だから、調査による基礎研究と、それをいずれ何らかの形で社会に還元することは決して切り離せるものではなく、ある意味でインバース・トランスレーション（逆橋渡し研究）ではないかと思います。

吉川 さつき河合さんが言った「リフレクション」、自分がいったいどうなっているんだろうということを見るときに、心理学のいろいろな方法はすごく役に立つんです。それは、心理学の中だけにいるとよくわからないけれど、別の分野の人たちと接しているとよく分かります。自分の実感をエビデンスで示すことができる。調査であれカウンセリングであれ、「自分たちはこんな方法を持っているんです」ということを社会に向かって伝えていけば、心理学やその周辺の広がりをもっと認知されるし、それがまたセンターの研究者にフィードバックされて次の研究の刺激になります。

背中を押してもらった

阿部修士 私は東北大学の出身なのですが、東北大学のキャンパスは主要学部がばらついているんです。文系学部が集まっているキャンパスとは別に、理学部、工学部は山の上にあって、医学部は別のところにあって、いつでもすぐに顔をあわせられるわけではありません。京大は、宇治と桂にもありますが、主な学部・研究科は一か所に集まっています。これは京大の中にずっといらっしゃる人は感じないでしょうが、相当大きな強みだと思います。

鎌田先生はいろいろな経歴があって、ここに来て違和感がなかったと話されましたけれども、私もここにいろいろな研究会を見せてもらって、自分の研究とはまったく違うことをやっているとは感じるんですが、違和感を感じるようなことはありません。それはたぶん、自分が文学部のとき、東洋史の教室で漢文



阿部修士 上廣こころ学研究部門特定准教授

の白文を読んでいた。そういうところから出発して、研究分野を変えていまを迎えたということも大きいと思います。

大学院時代は、主に2人の先生に指導を受けたのですが、どちらも神経内科のお医者さんでした。そういう先生方に教わって、その後アメリカに行ったときは、社会心理学の一翼を担っている教室に所属し、しかももともとは哲学者という先生の指導を受けることができました。そんなふうに、いろいろな先生方に教わったことで、ここに来る土壌をつくっていただいていたと思っています。

私が担当させていただいている連携MRI研究施設の運営はけっこう忙しくて、大変だなと思うこともありますが、先ほど内田さんがおっしゃったように、センターに来てほかの大学にいたらできなかったようなつながりは確かにできました。たとえば、MRIを中心として学内の先生とつながったり、学外の先生方とも共同研究の機会が広がりました。また、センターは全体として、インターネットなどの広報を通じて、非常にプレゼンスがある存在であるように感じています。

先日、日本心理学会から国際賞(奨励賞)をいただきましたが、ここにいなかったらいただけなかったという気がしています。京都大学の教員になって、研究そのものに加えて、研究の周りでもいろいろ背中を押し

てもらって、土台をつくっていただいた中でいただけた賞だなと思っています。

自分の研究に関して言うと、私は嘘とか人間の正直さといったことをやりながらも、医学系の先生方と一緒に研究を進めて、臨床研究の画像解析に携わっていたこともあります。そのときに培ったスキルが、思わぬところで役立つといったことも少なくありません。そんな経験を生かしながら、いまも様々な先生方と共同研究ができていっているのは本当にうれしいことです。

「こころ学」をどういうふうに進めるかは、このセンターのテーマだと思います。先ほど河合先生もおっしゃいましたが、共同研究もいろいろ始まっていますね。それはすごくいいことで、研究会で話していて、「ああ、このへんにつながりそうだね」ということでポンと共同研究が生まれたりするのがいい例だと思います。一方で、すこし時間をかけてじっくり熟成させて出てくる研究もあるようなイメージがあります。たとえば、いま私が計画している実験では哲学的な考察も加えたいという思いがあって、いくつかの哲学書をパラパラとめくっています。こういうことは、ここに来たばかりの2012年の時点では具体的に見えていたわけではなくて、意識の底で熟成されてきたものがだんだん形になってきたと思っています。

「こころ学」を心理学とか神経科学で研究すると、どこかに論文を出すのが成果のアウトプットとしてスタンダードなのですが、「こころ学」という分野があるわけではないので、それは難しいんですね。仕方ないから、いろいろなインプリケーションを詰めた心理学の論文を書こうかということになる。それも1つの手なんですけど、そもそも「こころ学」という学問のスタイルとして、アウトプットは論文を書くことだと決めつけなくてもいいのかなと思っています。

ます。

仏教学と「こころ学」

熊谷誠慈 今日日は「こころ学」創生がメインテーマですけれども、「こころ学」をつくるといったときに、心理学という言葉との対比をどうしても考えなければならないと思うのです。たとえばもし、ここが「京都大学心理学研究所」だったら、たぶん仏教学者の私はここにいないんじゃないかなと思います。というのも、私はもともとセンターに入るまで、こころの研究をしていなかったのです。同じ仏教学でも、こころに焦点を当てて研究している人であれば、仏教心理学などとエクスキューズできるのかもしれませんが、少なくとも私はそうではなかった。

ですので、「熊谷さんはいまどこにいるんだい。文学研究科か？」というふうに聞かれて、「こころの未来研究センターです」と答えると、みんなまずポカーンとするんです。仏教学をやっている人間がなぜそんなところにいるのか、と。

ただ、「こころ」という言葉は便利で、「仏教といえばこころだし」とか、「京都・仏教・こころ」ということで何となくつなげて理解してもらえることもありますね。これが「心理学」となると仏教学とは距離が出てしまう。もちろん河合隼雄先生など、ずいぶん早い段階から両者をつなごうとされた方もいるわけですが、仏教文献学者側からすると心理学はとても遠い分野だったんです。一方で、「こころ学」という言葉には、仏教学まで取り込んでしまう不思議な包容力がありますね。

私は京都大学文学部2回生のときにサンスクリット語を勉強し始めました。古典言語を習得するには膨大な時間がかかりますので、勉強していて気がいたら朝になっていたということが日常茶飯事でした。学部3年生になると、院生研究室の使用



熊谷誠慈上廣こころ学研究部門特定准教授

権を交渉して手に入れて、嬉しくて研究室にこもって昼夜を問わずひたすら文献を読んでいました。

インド仏教やチベット仏教の古文書を読むだけの生活が、日本学術振興会特別研究員の終わりぐらまで約10年間続きました。そして、特別研究員を辞める直前に、教育学部の座談会で吉川センター長に出会ったのです。そのとき初めて、文献学者以外の人たちと腰を据えて話をしました(笑)。実はそのときに私に声をかけてくださったのは吉川先生だけだった(笑)。さらに、その座談会に誘ってくださったのは、わずか2か月前に知り合ったばかりの松沢哲郎先生(当時、霊長類研究所長)だったのですが、松沢先生はこころの未来研究センターの協議員、吉川先生はセンター長ということで、いま思えば、目に見えない赤い糸でこころの未来研究センターとつながっていたように思います。

その後、京大の白眉センターという学際的な部局にいたんですが、基本的にやりたいことをやっていいということでしたので、私はひたすら文献研究をやっていました。

そのころに、ブータンの研究を始めるきっかけをつくってくださったのも吉川先生で、ある日、「ブータンと一緒に行きませんか」と誘われたのです。

吉川 そうです。私自身、ブータンのことをよく知っているわけでもな

かったのに、いま思えばどうして誘ったんでしょうね(笑)。

熊谷 最初、どうやってお断りしようかなと思いました(笑)。ブータンに行くとなると、出張中に文献を読む時間がなくなっちゃうから。でも、結局ブータンに行ったら、一気に価値観が変わってしまった。ブータンの田舎では、古文書に描かれていた世界がそのまま残っていたのです。それで、帰ってすぐブータン研究を始めようと思って、ブータン学研究室の前身となるような部屋を白眉センターに間借りしてつくりました。その後、こころの未来研究センターにブータン学研究室をつくっていただき、本格的なブータン研究をスタートさせたのです。こうして、学術貢献の1つとして、2015年11月に「国際ブータン学会」を立ち上げることができました。これまで「ブータン学」の国際学会はなかったんですね。私はその学会の事務局長に選ばれましたが、ブータン学研究室での取り組みが大きく評価されたようです。

ブータン研究を開始してから、インド仏教やチベット仏教の文献研究がしばらくおろそかになっていたのですが、ようやく昨年度からインド・チベット文献を読む時間ができました。ただ、そこには大きな変化があったのです。

私はそれまで大乘仏教の一部で、中観派(奈良仏教の三論宗に相当)という学派の思想史を研究していました。ずっと文学研究科にいたら、中観派の研究で一生を終えていたように思います。それが、こころの未来研究センターに入ってから、こころに関係する文献を探しているうちに、気がついたら部派仏教(≒小乗仏教)の文献を研究し、学会発表まで行っていました。仏教学者たちからは、大乘仏教から小乗仏教の研究に転向したのかと驚かれています。

鎌田 驚かれている(笑)。いいことだ。里山効果。

熊谷 仏教といえばどれも一緒だろうと思われるかもしれませんが、部派仏教と大乘仏教は時代も場所も違いますし、研究者もまったく違うのです。

そんなことで、最初、こころとは関係のない研究をしていた私が、こころの未来研究センターに着任して新たな研究法を模索しはじめ、昨年度になってようやく本格的なこころの文献研究を開始できたというわけです。

こころの地域性・歴史性

熊谷 今後、「こころ学」を創生していく上で、一般的な「心」と日本的な「こころ」、漢字で書くか平仮名で書くかは大きな違いになってくると思うのです。私の研究領域においても、インド地域での「心」、日本を除く東アジアでの「心」、東北アジアでの「心」。そうした地域の「心」と、日本的な「こころ」とをどう差別化していくかということが、文献学者の私にとって今後大きな課題になってくると思います。

河合先生は外延ということをおっしゃっていますが、私にとっての外延とはそうしたところかなと。そこが、いわゆる心理学と「こころ学」とのひとつの違いにもなるんじゃないかと考えています。

河合 この間の京都こころ会議は、テーマは「こころと歴史性」なんだけれども、いま熊谷さんが言われたような歴史性はまったく無視しているんですね。こころの歴史性とか、こころはどう捉えられてきたのかというこころ観は、大きなテーマだと思う。

ベッカー サンスクリット語で考えるのと日本語で考えるのとでは、世界の見方がまったく違う。

河合 やっぱりあれはインド・ヨーロッパ語だものね。

熊谷 そうなんですな。

鎌田 私は「こころ学」の問題に仏

教が寄与するところはとても大きいと思うのです。それを、広がりをもって着眼したのは河合隼雄さんだと思う。心理学と仏教学との関係や、日本神話と心理学との関係などを切り拓いた先駆者の1人だった。華嚴経とか明恵^{みょうえ}とか夢とか、いろいろなところからアプローチして臨床とつなげていったのですが、そのミッションは、ころの未来研究センターで再展開していくことができる。先日¹の京都ころ会議はその1つのスタートラインだったと思うのです。

私は、宗教学の大きな特色は、トランス、超越軸を人間のころの中でどう持つかという問題だと思うのです。そういう超越の技法という点で、仏教が果たした役割は大きい。それから、単に「ころ観」とか「ころ哲学」だけじゃなくて、修行や瞑想、儀礼の問題もけっこう大きいんですね。からだ²がころにどういうふうにかかわるかという問題意識を、宗教自体はずっと表現し、探求してきたわけです。それが「ころ学」の中でもこれから1つの大きな課題になってくると思います。

京都という場所性

河合 先ほど、内田さんはロールモデルのことを言ったけれども、おもしろい研究所やセンターって、だいたいどこでも1代目で終わるわけです。第2世代は難しい。でも、ころの未来研究センターは安心というか、逆にこっちも楽しみというか。

鎌田 それは里山力ですね。第1世代から第2世代がこういうふう³に育っている。里山的な環境は、そういう次のいい芽を育むと思います。

河合 それが、残念ながら、日本はけっこう家畜化していく(笑)。私は、放牧みたいないい加減さが人を育てていくと思うのだけど。

鎌田 そう思います。多様性とか土壌、空気、そういうものを養っていく環境そのもの、先ほどの言葉でい

うと場ですね。いい場がいいものを育てていく。

内田 センターが京都大学にあるということも大事だと思います。世間の期待もそうですけれども、京大が持っているリソースがある。学生の質や姿勢もそうですし、京都大学のころの未来研究センターなんだということはすごく思います。

吉川 それは本当に大きいですね。

鎌田 京都大学もそうだし、同時に、京都にあるということが持っている厚みと蓄積は非常に大きい。なぜ海外から人が来たいかという、やっぱり東京や大阪より、日本文化の精髓を代表する京都に行きたいというのはあると思います。そして行ってみると居心地がよかったです。それは非常に大きいんじゃないでしょうか。

つまり、場所性の問題です。たとえば、ころの未来研究センターは東京大学、あるいは東京という場所では育ちにくかっただろう。でも、京都という場所では違和感なくでき上がってくる。人が育っていくためには、「場」に非常に重要な意味合いがある。「ころ学」の問題を研究していくときに、普遍的な課題と、場所という個別で具体的な課題と、両方を攻めていくことができる。そういう意味で、ころの未来研究センターの場所性の問題は非常に大きいと思います。

私はこの前の京都ころ会議は、「京都・ころ会議」なのか「京都ころ・会議」なのかと考えました。つまり、京都という場所性が、ころの未来研究センターや「ころ学」にどうかかわるのかということは、非常に大きな課題だと思うのです。そういう意味でも、今後いろいろな発展が期待できると思います。

「ころとからだ」が大事

吉川 センターができたころ、里山のような場にしたい、という以外に

はっきりしたイメージがあったわけではありませんでした。その中で、「からだ」「きずな」「生き方」という3つのキーワードを決めたのは本当によかったと思っています。これは最初、河合さんと、この3つがいいんじゃないかと話しました。その3つをいろいろ膨らませていくと、いまの「場」のことも含まれるように思います。

最初、河合さんは「超越」も入れようと言っていたんですね。

河合 そうそう。

吉川 でも、私は「超越」ということがまったくわからなかったので、そっと無視して入れなかった(笑)。

鎌田 入れなくてよかった。最初からそれが入っていると、船橋先生が入ってこれなかった(笑)。

吉川 鎌田先生が、ころとからだ⁴がこれから大事と言われましたが、一昨日、教育学研究科の明和政子先生と話をしていたとき、まったく同じことを言っていたんですよ。彼女は、先端の発達科学の研究者なんです。子どものころの発達を考えると、「からだ」というキーワードがとても大事なんだと断言していたんです。

河合 それはなぜかという、からだ⁵を通さずにできることがすごく増えているからです。

吉川 たしかにそうですね。

河合 子どものころからバーチャルで育っていく。そういう人がどうなっていくかみたいなことは、もうすでにいろいろな形で現れ始めている。

ベッカー 倫理学のほうでも、「人間は考えてから行動する」とカントのような哲学者は語っていたけれども、実は違うのです。人間はまず行動をして、後で「なぜ行動をしたのか」と聞かれたら、前頭葉でその行動に合わせた理屈を考えて弁明します。倫理を教えようと思ったら、いくらカントの教科書を読んでも仕方がない。そこで脳(特に前頭葉)と体得(身体で覚えること)がつながって

くと思うのです。

鎌田 倫理によって恋愛はできませんよね。恋愛はからだところが先に行って、倫理は後からついてくる。

内田 何かすごいことを言われた(笑)。

鎌田 ここは大事なところですよ(笑)。からだの問題は大きい。特に、子どもから大きくなっていくとき、人のころはどういうふうに育っていくことができるのか。そのときのからだとか場、場所とかがどうであるのか。これからここに注目が行くと思います。

センターも成長している

吉川 子どもの育ちの話がでしたが、わたしはセンターも成長してきているんじゃないかと思っています。生まれたころといまはすごく違っている。私にとってとても大きかったのは、さっきも話が出ていましたが、准教授3人が来てくれて、それぞれにセンターで自分の研究を拡げてがんばってくれたことです。その姿を見ていて、私の中に具体的な目標ができた気がしたんです。

ゼロのところから出発して、最初の数年はとても苦しかった。組織の運営のことも事務的な仕組も何も知らなかったですから。大学の中でのセンターの位置もよく分からないし、「こころ学」をどうつくったらいいかもよくわからない。この小さなセンターはどうなっていくだろうという不安でいっぱいでした。いまは、このセンターは長く存在する価値があるし、長く存在しないといけないと思っています。家庭の中で世代交代が起こると同じように、組織にも世代がいい形でつながっていくことが、すごく大事だと思っています。

うちのセンターぐらの組織で、第1世代がつくったものに次の世代の人たちがさらにいいものを加えていくと、少しずつ組織がよくなっていくということが当然あるわけす

が、そういうことが、いま大学でも企業でも、あまり見なくなっているような気がするのです。いろんな事業の持続性がなくて、3年から5年でやるのがころころ変わってしまう。サステナビリティとか、言葉では皆が言っていますが、責任をもってそれを実現している事例は本当に少ないです。うちのセンターは、少しずつ世代が変わっても、こころについて総合的に研究して社会にそれを発信する、というミッションを果たしていく。いいものは続けてよくないところは改良して継続するという、当たり前なのがちゃんと実現できているモデルになりたいと思っています。

熊谷 いわゆる二項対立の弊害ですね。新・旧を対立させて古いものはすべて切り捨ててしまう。それでは単なる変化であって、発展とはなりませんね。やはり、古くても良いものは残すという包容力が重要である。「こころ」(そして「こころ学」)は、そういうところもすべて包括できる包容性を持っているんじゃないか。少なくとも、こころの未来研究センターの内部では、包容性や寛容性が機能しているように感じます。自分に与えられた仕事以外は行わないという教員はいないように思います。

河合 そんなことを言っている場合じゃないからね。

鎌田 総動員体制みたいな。

負の感情をどう捉えるか

吉川 これから「こころ学」をどのように創生するかですが、1つの大きな山がつくられていくというイメージではなくて、多面的なこころ像がつくられていく、そんな方向なのかなと考えています。

こころの未来研究センターができたころ、センターの短い紹介でこんなことを書きました。時間軸として、何十万年という進化の時間軸と、何千年という歴史の時間軸と、何十年

という人間の一生のような時間軸、その3つがこころの未来研究センターという1つの場所で議論されて、それぞれの時間軸から見たこころの姿が重ね合わされてお互いに共有される、そんなイメージです、と。

鎌田 4年前に「こころ学」の構想をしようとしたとき、私自身の「こころ学」の1つの観点として、「こころ観」をいかにバラエティを持って見通すかということが、「こころ学」の基盤に必要だと思ったのです。

もう1つは、センターのプロジェクトの1つの柱にした「負の感情」です。いまは科研の「身心変容技法と霊的暴力」というふうに名前を変えていますが、「負の感情」というのは、人間のこころの中でどうしても起こってくる。そういう「負の感情」をどう見つめ、どんなふうに昇華し、解決していくことができるのか。それは、先ほどのコンサルティングとかカウンセリングとか、いろいろな手法があると思うのです。仏教なんかまさにそれに組みこんできたわけですが、それをどういうふうに切り替えていくことができるのかは、大きな社会的な課題であると同時に、人間研究としても、とても重要なところだと思います。

嘘をつくこと、嘘をつくことに対して罪責感を持つことも含めて、そういう「負の感情」の起こり方や、それを切り替えていく力。そのとき、こころはこころだけで捉えきれない。先ほど出たからだの問題、あるいは身心全体を貫いていくある種の力、超越的な力の問題がある。「逆境に強い」というのは私の大きな課題ですけれども、こころのあり方とか生き方の、いったい何が逆境を超えさせていく力になるのか。そういうことが、「こころ学」研究の重要な柱になっていると考えています。

ジョイント・アポイントメント

船橋 私は、鎌田先生が言われたよ

うな「こころ観」とか「こころ学」という考え方に関して批判するわけではなくて、ひょっとしたらそのとおりだと思います。だけど、いままでの皆さんのお話を聞いていると、どちらかというと研究の方向が人文系に集中している。しかし、こころにはもっと多様な見方がある、生物学的な、あるいは医学的な見方もできるわけです。だから、もちろん人文学のほうでこころを詰めていくことも1つの方向だけれども、生命科学の観点をもう少し入れることも必要ではないかと思えます。

そうすると、たくさん山ができてあがってしまっていて統一がとれないということがあるかもしれないけれども、それがこころの多様性だと考えれば、「こころ学」とはそういうものだとも言えるのではないかと。

そういう観点から、センターの組織としてどういうものが理想的かと考えると、たとえば、欧米の大学の組織では、5名とか6名の教員がコアとなり、そこへ他部局のファカルティのメンバーがサブ・コアという形でたくさん加わっています。

このような形で人文学の人も、心理学系の人も、医学系の人も取り込んで、もっと幅広い体制をつくったほうが、将来的にはメリットがあるんじゃないかと思えます。そういう人が加わってくれば、もう少し多様でおもしろい共同研究もできるかもしれない。

ベッカー イギリスでは、七つの大学が「スピリチュアリティ」という名称の大学院プログラムをつくっています。私はその委員会の1人だったので、カリキュラムが送られてきます。それを見ると、船橋先生がおっしゃるように、中心にいる責任者は3人とか4人で、あとはジョイント・アポイントメントのように、医学・生理学など様々なところから、この授業や講演シリーズに協力する、と申し出ています。この二重構造が主流だと思います。

日本では、まだそれがあまりできていないには思えないのですが、我々のセンターでは、もう少し生かされたらいいと思えます。

船橋 特にこころの問題というのは、もちろん臨床心理学でも重要かもしれませんが、精神医学などでも重要なテーマになっています。だから、そういう人たちも入ってこられるようなシステムをつくり、そういう人がメンバーであることもすごく大事ではないかと思えます。

規模を大きくできないから、ジョイント・アポイントメントのような形でやるのが1つの方法です。センター設立時の議論で、こころの未来研究センターは、京都大学だけではなくて、その周辺の大学も含めた、こころに関する研究のネットワークの中心になってもらいたいという希望がありましたね。そういうものをつくることは、1つの目標かもしれない。

鎌田 いまだいたいそういう方向に向かっていますし、実際に着々と進めているとも言えるんじゃないでしょうか。

吉川 第2世代に期待ですかね(笑)。

こころ観とこころの外延

河合 「こころ学」をどうしていくかということ、この体制をどうしていくかということは分けて考えることができませんね。

私は、今年始まった京都こころ会議が、「こころ学」をやっていく上で、すごく大きな意味があると思っています。しかし、どういうものになっていくかはなかなか簡単には見えてこない。京都こころ会議を3年、4年やっている間に、ある程度の形が見えたらいいなと思っています。

鎌田さんともカブるんだけれども、「こころ観」はけっこう大きい。しかも私にとっては、こういうこころの考え方があったとか、先史時代の人はいまこころをどうしていた、中世



京都こころ会議シンポジウム「こころと歴史性」(2015年9月13日、京都ホテルオークラ)のフライヤー

のころは、というだけではなくて、それがいまの我々の中でも生きている——こころの古層という言い方をしますが——そういうものとして認識しつつ、現代のこころはどうなっているのかという部分にとっても関心を持っています。

そういう意味で、人文科学の研究はすごく大事です。中国でも、夢の理解は歴史的にどんどん変わっているのです。そうすると、西洋のあんなふうに意識が確立されていくプロセスとは全然違う形での意識の変化が中国にもあることがわかるし、こころの捉え方の変化もおもしろい。こころは、そういうふうに変まっていったとも言える。そして、それがいまの我々にもある。そのへんの共同研究は大事だし、そういう「こころ観」から、かなりこころに迫っていけるだろう。

それから、これも鎌田さんとカブるんだけれども、儀式とか修行というのは、「こころのワザ学」と一緒にやろうと考えています。こころにどういったワザがあるのか、ノウハウにとどまらず、そういう働きかけを通じて見えてくるこころは、「こころ学」の中でかなり大きいと思っています。

鎌田 河合さんは能の研究を始めていますね。京都こころ会議でも言われていた、お茶やお花の世界のワザから探っていくのも大事な課題です。河合 そうです。そうすると、こころの外延が広がっていくわけです。近代心理学は、すごく狭いこころを扱っている。

自分でやっているいろいろなプロジェクトを考えると、外延として、もちろん「他者」は大事なんだけど、「身体」も大きいし、「死」も、こころにとってとても大きいことじゃないかと思っていて、今後、そういうことをやっていきたい。スピリチュアリティとかマインドフルネスという言い方は個人的には好きじゃないんです。やはり超越がテーマだけど、そういうのとは違う形でやっていけたらいいと思っています。

こころ学の内包と外延

ベッカー 心理学は無意識の発掘をやってきたのですが、仏教もある意味で、無意識の発掘や自己理解に迫ってきました。倫理問題や社会問題（たとえば老々介護や温暖化）でも、理屈でこうしたほうがいとわかっていても、なかなか実生活をそのように変えられない。嘘とは違うが、自分のすべきと思っていることと実際にやっていることのずれがある。その理想と煩惱執着の差は意識と無意識の差でもあると思うのです。下條先生流に言うと、一般市民の無意識のこだわりを理解して初めて、それをうまく利用したり、障壁を突破したり、よりよい介護、よりよい教育をもたらす、よりよい社会になっていけると思うのです。

つまり、「こころ学」というのは、困っている患者のこころの話聞くだけではなく、社会の無意識やこだわりなどを調査等で研究することも必要ではないでしょうか。すでに内田先生もやっているし、もしかしたらfMRIでも発掘できるようになる

かもしれません。

内田 心理学にもいろいろありますが、特に私の立場でいうと、心理学はこころの「働き」についての学問だと思うのです。つまり、メカニズムであり、たとえば、どういうときにどういう感情が芽生えるかという、まさに「働き」、機能の研究と言ってもいいかもしれない。しかし、「こころ学」というのは、「働き」に限定されないと思うのです。

「働き」というのはある種の内包的なもので、「こころ学」は内包だけではなくて、外延的なものを含むものではないかというのが私の理解です。心理学者は、おそらく「働き」みたいなものを捉えるのはうまい。しかし、外延的なところに触ることが、方法論的にすごく難しいところがあります。「こころ学」をつくっていくためには、医学とか身体、あるいは生態、動物、環境、そういう外延の広がりみたいなものを含めて定義していかないと、おそらく難しいだろうなと思っています。

「こころ学」でいう「こころ」は集合性のようなものを持っていて、その集合性は、歴史的な来歴、あるいは環境なども含んでいるように思います。

阿部 私は、自分は心理学と神経科学の中間ぐらいに位置していると思っています。究極的に、脳の研究からこころを見ようとする、神経細胞が発火する（活動電位に達すること）かしないかというパターンが無数にあって、でも、瞬間瞬間の経験が脳それ自体に影響を与えてしまうわけです。そういうことを考えると、定量的に人のこころを説明できるようになるのは、かなり難しいなと思います。

それでも、いま皆さんのお話を聞いていて思ったのですが、「こころ観」をどう捉えるかということは非常におもしろい問題だと思っています。それは、ほぼ人間観と変わらないなと思っています。人間観も、時代

によってゆっくりと変わっていきまますよね。ベッカー先生がおっしゃった無意識というのは、たとえば、フロイトに対しては賛否両論あるでしょうけれども、無意識が大事だということを行ったのはすごいなと思っています。

たとえば、センターの特任教授でもある下條先生は、科学的に無意識がどれくらい重要かというデータを出しています。無意識が私たちにそうとう影響を与えているということが、フロイトが初めて言うてから次第に理解されてきて、私たちが人間をどう捉えるかというときに少しずつ影響を与えていると思うのです。

そういうゆっくりとした人間観の変化があって、それがこれからも続いていく。無意識の研究はあくまで全体の一例ですが、脳の研究、心理学の研究、臨床心理学といろいろなアプローチがあって、いまの形になっていると思います。これはまさに多様なアプローチによってこころの働きを明らかにしてきた、1つの好例ではないかと思っています。

そういうことを考えると、これから、二百年、三百年、あるいは千年かかるかもしれませんが、変化する人間観を先取りするようなことを「こころ学」で実現できないだろうか、と考えたりしています。

様々なこころの対比

熊谷 心理学と「こころ学」を差別化することは必要だと思います。英語に直すと、「サイコロジ」と「こころロジー」になるんですかね。たとえば、心、あるいは魂は、ギリシャ語で「プシューケ」と言いますね。「プシューケ」とは何かという議論は、ギリシャ時代から行われてきて、アリストテレスもいろいろ書いています。どういうものを「心」と認めるかについて、西洋の哲学者たちが二千年以上徹底的に議論してきているわけですね。

インドの哲学でも同様に「心」について議論されてきましたが、日本では論理学が発達しませんでしたので、「ころ」とは何かという議論はむしろこれから始めていく段階だと思うのです。「ころ」というものがだいたい議論し尽くされ、どの理論が正しいかを定める段階になって初めてサイエンスの出番となり、いずれの理論が科学的に正しいのかを検証していく。そうすれば、科学重視の現代人



座談会を終えて

にも納得できるわけですね。ただ現実的には、議論が終わるまでサイエンスを放ったらかしておくことはできないでしょうから、哲学的議論と科学的検証を同時に進めていく必要があると思います。

日本以外の「心」と日本的な「ころ」とがどう違うか。先ほど人間の「心」が問題になりましたけれども、仏教では動物にも「心」の存在を認めます。アリストテレスに至っては植物にも「心」を見いだそうとしていましたが、山や川にも「心」があるとはさすがに言っていない。山川草木に「ころ」を見いだすという点で、日本は特徴的な「ころ観」を持っているように思います。

そういう違いを論理的に突き詰めていって、科学的実証性をもって、21世紀の人々を納得させていくことが、今後のころの未来研究センターの大きなミッションの1つになっていくのかなと考えています。

「ころとは何か」を探究していくときには当然、心理学の学術的蓄積は重要なカギとなるでしょう。しかし、「ヒトのころ」だけでなく「モノのころ」までも解き明かすとなれば、既存の心理学だけではやはり限界があります。そうした意味で、

ころの未来研究センターには、宗教学者など心理学以外の研究者がいてもいい、あるいは、いるべきなのかもしれませんね。

ベッカー 日本語でいう「ころ」は、個人に限定されないだけでなく、人間にも限定されませんね。複数にわたる、場合によっては「空気」にまで及ぶようなもので「ころ」で表せます。時代の「ころ」とか。熊谷 そうですね。時間も宇宙もそうですし、先ほど話に出た環境ということも、「ころ」に密接にかかわってくると思います。

河合 私は京都ころ会議のときに、クロズドシステムとオープンシステムの話をしたのですが、ちょっと似ているのは、内田さんが先ほど言った内包と外延の話です。心理学がやってきている閉じたファンクションは、まず何かあるからファンクションがあるのであって、そうではなくて、オープンなころを含めるのが「ころ学」だという発想はおもしろいと思います。でも、オープンになりすぎると、何をしているかわからないと言われるので、この加減がむずかしいですね。

吉川 ころの未来研究センターの強みは、文献学からフィールドワー

ク、行動実験、脳計測、社会調査、臨床実践まで、ころを理解するためのいろいろな方法の専門家がそろっていることと、もう1つは、自分の専門分野に閉じてしまわない、オープンな考えをもった人が集まっていることではないかなと思っています。これからの10年、20年でいま以上に活気のあるセンターにしていこうと考えたときに、率先して新しいつながりを作って新しいプロジェクトを企画する、そうした研究者自身の積極的な姿勢というか心意気がこれまで以上に重要になってくると思います。そういう「ころの未来マインド」をもった研究者が、相互に親しくやりとりしながらユニークな成果を発信する、そんなセンターであり続けたいですね。

(2015年9月29日、京都大学ころの未来研究センターにて。撮影：坂井保夫)